

イギリス版猫の恩返し

眞鍋由比

『ボブという名のストリートキャット』ジェームズ・ボーエン著 辰巳出版2013

今年の夏に映画が日本公開されます。
ロンドンのホームレスの青年の話。

小さいころから両親の折り合いが悪く、母についてオーストラリアにいったけど母の仕事の関係で学校を転々と変わらなくてはならず、ぜんぜん友だちもできなかったジェームズ。ロンドンに帰ってきてバンド活動をしたりしていたけど、薬物依存になってホームレスの生活をしていて、自分も含めて毎日がどうでもよかった。

ある日、暗闇の中、階段にうずくまっている茶トラの猫を見つける。ところどころハゲていて、足も引きずっている猫は、不思議とジェームズになつてきた。猫にありがちな人見知りな感じではない。こんなにヒトになつくのだから飼い主がいるのでは、と近所に聞いて周るが、誰も知らない。小さなとき、白い子猫を亡くしてしまったジェームズはどうしても猫を見捨てることができなかった。猫の治療費は高い。ホームレスの彼にとってはほとんど全財産。けど、この猫を治療できるのならと、その治療費を払って猫を連れ帰って餓えそうになりながら看病したジェームズ。もともと賢いネコだからいつでも野良猫に還っていい、と覚悟はしていたのにその猫はバスにもついてきて、隣に座り、ジェームズが流しのミュージシャンをしている隣でじっと座って見ていた。ジェームズの肩に乗るのがお気に入り。その猫が人気になって、お金をギターケースに入れてくれるひと、猫にごはんやマフラーを作ってくれるひとが次々と現れた。もちろん人気者の猫を連れていくと妬まれて、やってもいない犯罪者の汚名を着せられそうになったり、おなじビッグイシューの販売仲間から陥れられそうになったりすることもある。けれどジェームズはボブと名づけたその猫がいる限り、猫を守ろうとし、その姿に他の人たちも信頼を寄せ、やがて自立していくようになる。親とですら、人間同士の関係がうまく結べなかった青年が、猫を助けたことで自分も助けられ、人間のなかでも認められるようになったというとても単純なお話。けれど薬物依存からジェームズが脱出しようとするとき、荒れて荒れてどうしようもないときは距離をとるけど、ご飯が欲しいなど必要なときにはきちんと主張してジェームズの家族としての役割を果たさせ、お互いを必要とし、成長させるパートナーとして本当にこのボブは立派！



ジェームズを立ち直らせたボブ、本人というか実際の猫・ボブを映画で見ることができます。ボブがボブ自身の役をやっているそうです。

どうして「ツイン・ピークス」のボブなんて名前をつけたのか、この本を読んでください。私はちょっと可哀想だと思っています。